黙示録12章10－11節 「悪魔に打ち勝つ信仰」

1A 兄弟たちの告発者

1B 偽りの「全き者」

2B 信じる者たちへの攻撃

1C 主を恐れるヨブ

2C 帰還した民

3C 苦しむ者たち

2A 打ち勝つ兄弟たち

1B 子羊の血

1C 宥めの蓋

2C 死からの救い

3C 血にあるいのち

2B 証しのことば

1C 真実な証人

2C 人の前での証し

3B 死に至るまでの忠実

本文

黙示録 12 章をお開きください。私たちの聖書通読の学びは、黙示録 11 章まで来ました。午後に、12 章を一節ずつ見ます。今朝は 10-11 節に注目します。「[10] 私は、大きな声が天でこう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と王国と、神のキリストの権威が現れた。私たちの兄弟たちの告発者、昼も夜も私たちの神の御前で訴える者が、投げ落とされたからである。[11] 兄弟たちは、子羊の血と、自分たちの証しのことばのゆえに 竜に打ち勝った。彼らは死に至るまでも 自分のいのちを惜しまなかった。」

12 章は、宇宙で天使たちが戦っているみたいな、SF の世界に見えるようなことが書かれています。けれども、真理です。エペソ書には、「6:12-13 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、一切を成し遂げて堅く立つことができるように、神のすべての武具を取りなさい。」とあります。私たちの住む世界には、悪の勢力があり、それに対して、神に仕える勢力もあり、その相克の中で、目に見える世の出来事があります。

天において、イスラエルのために戦うミカエルと、その指揮の中にある御使いたちが、悪魔とその使いたちと戦いました。そして、悪魔とその使いたちが劣勢になり、ついに天から地上に投げ落

とされます。その後で、天において大きな声がしました。それが、ここの言葉です。ついに、神の救いと力と王国、そして神のキリストの権威が現れたと叫んでいます。

1A 兄弟たちの告発者

その天において、悪魔は、次のことをしていました。「私たちの兄弟たちの告発者、昼も夜も私たちの神の御前で訴える者」悪魔が、天で絶えず、昼も夜も御前で訴えていたのです。天にいる聖徒たちの多くが、迫害に耐え、殉教した人たちです。天に入って安息しているのですが、ここにまで、兄弟たちを告発しているのですから、やってられないですね。悪魔のギリシア語、ディアボロスは、「中傷者」「告発者」の意味です。これが、悪魔がやる仕業です。

1B 偽りの「全き者」

悪魔の偽りは、極めて巧妙です。これからの説明を、注意深く聞いてください。イエスは、山上の説教で「あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい。（マタイ 5:48）」と言われました。これは主の命令でありますが、では、「完全でありなさい」とは何なんでしょうか？多くの人が、ここにおいて悪魔の巧妙な偽りに陥っています。いわゆる完璧になると思い込んでいることです。ちょうどテストで百点満点を取るように、一つの落ち度もないことを意味すると思い込みます。

悪魔はかつて、「全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった」と呼ばれました（エゼキエル 20:12）。しかし、彼は、「密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。」と言いました（イザヤ 14:14）。神こそが完全な方、欠けの無い方であり、この神と一つになること、言い換えれば、全き信頼を寄せ、全き心で従うことです。自分自身が欠けのないものになろうとするのではなく、欠けのない方に拠り頼むことです。しかし悪魔は、自分自身がいと高き方のようになろうとしました。全き人というのは、子が父に頼り、従順になり、父に倣うように、自分自身が完全無欠になることではなく、完全な父を恐れ敬い、この方の守りの中にいることです。

ところが、悪魔は人に、自分自身にある欠けを示します。そして、あなたはできていないですねと責めます。そして、あたかも、自分自身がきちんとしなければいけないと思います。そこで、完全な神に拠り頼むことが、あたかも悪いことであるかのように、そそのかすのです。エバに対して、蛇が、「創世 3:5 それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」と言いました。神により頼んで、善悪は神にこそあることを信じて歩むのではなく、自分自身に善悪を持って、しっかりと自分で神のように生きるとそそのかしています。神により頼んで完き者になるのではなく、神から独立して、きちんとするということです。

2B 信じる者たちへの攻撃

こうした前提をもって、悪魔は私たちの欠けを、いや、欠けに見えるようなことをあげつらいます。

1C　主を恐れるヨブ

その代表的な攻撃は、サタンのヨブについての告発です。「ヨブ 1:9-11 サタンは【主】に答えた。「ヨブは理由もなく神を恐れているのでしょうか。10 あなたが、彼の周り、彼の家の周り、そしてすべての財産の周りに、垣を巡らされたのではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地に増え広がっているのです。11 しかし、手を伸ばして、彼のすべての財産を打ってみてください。彼はきっと、面と向かってあなたを呪うに違いありません。」」ヨブが神を恐れているのは、彼があなたに祝福されているからだということです。ヨブが富んでいることに、何の問題もないのですが、あたかも富の誘惑に惑わされているのだと決めつけて、告発していいます。

2C　帰還した民

そして、サタンが、大祭司ヨシュアを告発している場面が、ゼカリヤ書３章に出てきます。「3:1 主は、【主】の使いの前に立っている大祭司ヨシュアを私にお見せになった。サタンが彼を訴えようとしてその右手に立っていた。」ヨシュアの祭服は汚れていました。それで、サタンがこのことを訴えていたのです。

彼らは、バビロンから帰還したばかりでした。多くの背きの罪を負っています。しかし、主は七十年が満ちて、これらの罪を赦し、新しく始めることを決められたのです。彼らを、彼らの罪にしたがって裁くのではなく、罪を赦して、慰めようとしておられたのです。悪魔は、私たちの過去を断罪します。もちろん、私たちは救われた後も、過去の罪の傾向、肉の弱さをもっています。そこにつけ入って、私たちが新しくキリストにあって造られたことに、真っ向から挑みかかるのです。

それで、主ご自身がサタンを咎められます。「3:2-4 【主】はサタンに言われた。「サタンよ、【主】がおまえをとがめる。エルサレムを選んだ【主】が、おまえをとがめる。この者は、火から取り出した燃えさしではないか。」3 ヨシュアは汚れた服を着て、主の使いの前に立っていた。4 御使いは、自分の前に立っている者たちにこう答えた。「彼の汚れた服を脱がせよ。」そしてヨシュアに言った。「見よ、わたしはあなたの咎を除いた。あなたに礼服を着せよう。」」エルサレムを愛して、選ばれました。私たちも、キリストにあって神に愛され、選ばれました。そして、ヨシュアがきよい祭服が与えられたように、キリストの義を私たちは身につけています。私たちが清いのではないので、神の恵みで、キリストの義と聖をいただいているのです。それで、清く、正しいんですね。

3C　苦しむ者たち

そして今、ここ天にいる兄弟たちは、おそらく多くが患難の苦しみを経て、殉教した人々です。苦しみを経た人たちが、サタンによって責め立てられていたということです。人が苦しむ時、罪定めの声が聞こえます。サタンからの声です。このような苦しみを受けているのは、神が見捨てたからだとか。あなたがこんなことをしたら、苦しんだのだとか。神が敵対していると感じるのです。

パウロは、ロマ 8 章の後半をこの問題に取り組んでいます。まず、8 章の始まり、1 節を、こう始めています。「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」キリストにある者は、決して罪に定められないのです。そして、8 章 17 節から、キリストと共に苦難を受ける、という話をしています。初めは、被造物と共にうめいているはなしをしています。そして、御霊がことばにならないうめきと共に、執り成しをしておられる話をします。そして、神が、みこころのままに、すべてが相働いて、益としてくださる話をします。

それからです、これらのことを神がしてくださるのであれば、神が私たちに味方しているならば、だれも敵対できないという話をしています。ここから、まさにサタンの告発に対する、徹底的な反駁が始まるのです。「ロマ 8:31-34 では、これらのことについて、どのように言えるでしょうか。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。32 私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか。33 だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。34 だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです。」どうですか、これらすべて、苦しむ兄弟たちに対する、サタンの告発、中傷そのものです。罪定めです。それに対して一つ一つ、パウロが力を込めて、否と断言します。

2A 打ち勝つ兄弟たち

そして 11 節で、「兄弟たちは、子羊の血と、自分たちの証しのことばのゆえに 竜に打ち勝った。」と言っていますね。

1B 子羊の血

1C 宥めの蓋

初めに、「子羊の血」による勝利です。私たちは既に、黙示録 5 章で、血を流した子羊が勝利を得ている場面を見ました。「5:6 また私は、御座と四つの生き物の真ん中、長老たちの真ん中に、屠られた姿で子羊が立っているのを見た。」この方が、いけにえの子羊として流された血こそ、悪魔は、私たちを罪に定める根拠を全て失ってしまっています。大祭司が、神の民のために血を携えて、その血を至聖所の、宥めの蓋のところにふりかけます。「宥めの蓋」というのが、神の正しい、罪に対する御怒りをすべて満たすという意味があります。

そして、この方は告発者であるサタンから、私たちを守るのです。弁護者となっておらえます。「Ⅰヨハ 2:1-2 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます。2 この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。」罪を犯しても、御父の前でとりなしておら

れます。これが、前の訳では「弁護者である」と訳されています。

2C　死からの救い

そして、キリストが血を流され死なれたことによって、私たちが、罪から来る死に対する恐れから解放されました。サタンが私たちに与えるのは、死に対する恐怖です。「ヘブル 2:14-15 そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」

3C　血にあるいのち

そして血には、いのちがあります。この方の血は、私たちの罪の代償のために支払われたのみならず、私たちに霊的ないのちを与えています。「ヨハ 6:55-57 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。」

2B　証しのことば

次に、「自分たちの証しのことば」のゆえに、竜に打ち勝ったとあります。

1C　真実な証人

まず、主ご自身が、父なる神の真実な証人です。黙示 1 章 5 節で、「確かな証人」と呼ばれています。主が、父なる神を忠実に示してくださっていました。そして、私たちはイエスご自身を証しします。イエスがどういう方なのかを、私たちのことばや行いで示すのです。

2C　人の前での証し

ここで大事なのは、人の前で証しすることが、神の前で証ししていることに等しいことです。「ルカ 12:8 あなたがたに言います。だれでも人々の前でわたしを認めるなら、人の子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。」私たちが、自分の心にある希望を、心の中だけに留めておくならば、霊の戦いにおいて弱くなってしまいます。人前で言い表すことによって、そこに悪魔の打ち勝つ力が現れるのです。

3B　死に至るまでの忠実

最後に 11 節の後半、「彼らは死に至るまでも　自分のいのちを惜しまなかった。」と言っています。そうです、彼らは、自分が死ななければいけなくとも、イエスの御名を堅く保っていました。それで、死に至りました。証しというギリシア語そのものが、殉教という意味合いを持つほどです。

私たちは、必ずしもこの肉体が滅ぼされることはありません。けれども、日々、私たちは自分たちの生存本能との葛藤があります。信仰によって生きるというのは、自分が生きるための道から真逆を歩むこともあるのです。教会の牧師になるというと、必ず、未信者の日本人の方からは、「どうやって、食べていくんですか？」でありますね。そう、生きていくための道と異なるからです。与えれば、受けるともイエス様は言われましたが、それが理解できません。

イエスは言われました。「マル 8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」自分が生きるための道を選び続けて、イエスとその福音を信じることを拒めば、必ずそのいのちは失っていきます。自分が求めているものが、失われるのです。そして、イエスのために、福音のために、自分を失っていくと、そこにイエスにあるいのちがあります。自分を救っていくのです。それで、彼らは、自分が死んでも、その後に命があることを知っていたので、いのちを惜しみませんでした。

ここで私たちは、挑戦を受けます。与えることのために生きますか？ということです。自分のいのちを、主の前に注ぎだすことに決心していますか？そこに明け渡す時に、必ず受け取ります。主ご自身を受け取っていくでしょう。